

彩のきずな栽培暦

「彩のきずな」は中生の早に属する品種で、「キヌヒカリ」の後継品種として育成されました。収量性が高く、イネ縞葉枯病抵抗性を持つ、高温に強い良食味の品種です。

品種の特性（キヌヒカリに比べて）

- 出穂期は2～3日早く、成熟期は同等。
- 稈長は10cm程度短く、穂数は1割程度多い。
- 耐倒伏性は「やや強」で「朝の光」並。
- 収量性は高く、1割程度多収。
- 食味は粘りがあり、同等以上。
- 高温に強く、白未熟粒の発生が少ない。
- 「彩のかがやき」と同等の病害虫抵抗性を持つため、減農薬栽培に適する。

適応地域及び作型

- 県下全域の早植栽培地帯、または6月末までに移植可能な普通栽培地帯。
- 障害型冷害に弱いことから早期栽培は避ける。

病害虫防除

- 減農薬栽培を基本とする。
- 耕種防除（置き苗の撤去、畦畔管理、ケイ酸資材の投入等）を励行する。
- 紋枯病の発生に注意する。
- 穂いもちには「やや強」であるが、罹病しないわけではないので、葉いもちが発生したら、必ず防除する。

中干し

- 有効茎が確保（20～25本/株）できたら、中干しを確実に実施する。

施肥

- 基肥の過剰施用は、穂数が過剰となり、登熟期間が不良気象の場合、くず米が増加しやすいので避ける。
- 穂肥施用時の葉色が目安より濃い場合は施用時期を5日程度遅らし、施用量も3割程度減らす。

収穫

- 刈り遅れないよう早めの収穫を心がける。
- 登熟期間が不良気象の場合、帯緑籾が残りやすいので、出穂後日数、積算気温を目安に収穫を行う。

乾燥・調製

- 高水分籾の高温急激乾燥は絶対に行わない。
- 食味の確保、維持のため、過乾燥とならないよう注意する。（玄米水分15%を確保）
- 調製は必ずライスグレーダ（1.8mm目以上）で行う。

生育ステージと主な作業の目安

早植栽培		4月		5月		6月			7月			8月			9月		
月	旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	
生育ステージ		移植 60～50株/坪 2～4本/株	移植期			有効分げつ 決定期		最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期	出穂期					収穫	
水管理				浅水管理				中干し	間断かん水		深水		間断かん水	落水			
主な作業		播種 施肥 5～7 Kg/10a	土改剤散布 基肥散布・代かき 箱剤散布・移植 除草剤散布				中干し 6月下旬～ 7月上旬頃		紋枯病防除 穂肥施用	穂肥 3～2kg/10a (出穂前25～23日) 幼穂長1～2mm 葉色4～4.5を目安					収穫作業		
																出穂後日数 35～48日 帯緑籾割合 50～10% 積算気温 900～1200℃	

普通栽培		5月		6月		7月			8月			9月			10月		
月	旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	
生育ステージ		移植 60株/坪 2～4本/株 疎植は避ける	移植期			有効分げつ 決定期	最高分げつ期	幼穂形成期	減数分裂期	出穂期						収穫	
水管理				浅水管理		中干し				深水		間断かん水	落水				
主な作業		播種 施肥 5kg/10a	土改剤散布 基肥散布・代かき 箱剤散布・移植 除草剤散布			中干し 7月中旬～ 7月下旬頃		紋枯病防除 穂肥施用	穂肥 2kg/10a (出穂前25日) 幼穂長0.5～1mm 葉色4を目安						収穫作業		
																出穂後日数 38～48日 帯緑籾割合 40～15% 積算気温 900～1100℃	